駿臺雜話

駁墓玉雜話卷二目錄

# 駿墓雜話卷二目錄

義集


武運の稽古
天人相勝
鈴木某う歌
不收不求
秘事々
仁ハ心の〻のち
浩然乃氣
民々主老の天
善悪の報
愛執浮世
朝うかの花一時
春秋乃おもひで
佛となるやう
義ハ心れきまる
敬の工夫
富士のまち教堂

# 天下の寶

## 風俗ハ政の由ル

## 武運の稽古

ある時、数人の武芸者が集まって、例の文談に及んだ。前にも武芸と各の家業とを比べ、常より稽古あるべきやうに、但し武芸と武運とは、いつも並べて論ずるものなれども、武運は武芸を達したる人なりとも、武運にそなはらざる人の沙汰あるべき。長沢の合戦に、武芸ある士物ゝく鬼武蔵と、そのとき名ある士をもとゝして、ゝく鉄砲より中ゝく即時に果ぬ。武芸も武運も用ゐるべきやうに、始めは武運あつて、その武芸ある

ゐるも。名ハ武藝の稽古わるゐが。生涯武運の稽古ハ。終ふ。さて武藝の稽古ハ。ぞくの師より。伝授をうけ。ぞくの師ハ。免許をとりて。ぞくの師となるが。武運の稽古ハ。藝術の師ハ。なきものと。ぞんじ。ぞくの師ハ。なきものと。ぞんじ。ぞくの師ハ。なきものと。ぞんじ。ぞくの

よろしからざるものなく、天よろしからざるときは、世治まらず、運
ハ天よりまたやむをえざるところ、運をハ天よりいのらざるべからず、天の

行度萬古と云ふ。一日の食を見ては遥かに上ハ空のかなる事を思ひやり推歩するに分秒をも違ふ事なし。是を遵法するといふなり。又おもふに天下其信といふ。始ハ人々のまゝ無事なるべきを仁義信などゝおこれば、あれやこれ天心を叶へんとて天心なからんと擁護なすべきとて事ほらく仁を行ひ假り信をもつて。其驗おるべきを見おこれば爭生じおるあまなり。常に仁をなく人をそこなひ假を以て驚かし人を欺くをか。是を以て家門を滅し其誠天をあざむくさるゝ不具共冥助もおよばなん。戰場おゐても

福機よ觸と矢石おもおるべきを以て。箭の武運の私有古

禍機を觸れ。矢石をもわざるに。翁の武運の私有古
といふ。そもそもすべて仙老人の僻言を用ゐるもの
なり。されば世俗の有さまをみるに分を利して
人をそしり。偽を飾り詐を飾る。自ら己が世を渡る
よき計ひをなすものと。終には天より見捨られ
て夫よ見捨られなば。いかによきものもおのづから
世は時の古実の邸宅を造ることを禁じ
ぬ。されば家に諸芸の捧ぐるものなし。武
運長久といふ牌を門に釘をもて打ち。家或は刑戮せらる。
或は子孫乃後まで。武運長久の牌と共に門もおのづから

之屋といえども必ず吟ずべく慨嘆すべし。
善悪は報

世家滅びて跡方もなく、良行ありて名を辱しめざるは、晩学を保さるをいふ。況や等ハ皆武運の拙きをかこち、その厭勝の力を以て武運をまもらんとなり。孔子も獲罪於天無所禱也といへり。況や仏ハ論ずるに及ばず。符章陀羅尼やうのまやかしを信ずる婦女子のごとくんバ、丈夫たる者の有為ますます失ひ、迷ひを増すに過ぎざるべし。況や武士たる者の惑ハさらにすすめざるの旨ハ、古今通の武門の心得べきことにして、毛詩の膽烏変止于誰

之屋という表札吟ぢく慨嘆よおもしろうおもしろうおもしけん。

## 善悪は報

志ぢろうくおもうく在中よろく角よりの報ぢく武運乃稽古と中ますおもうく雑き事ろうく感服ぢく仕る人今ようく計略古ろれあろうくおもうく守ぢくれ但世ぢ人仁あつく依る人は福おろもおり不仁不信なる人は禍おろもおり。爾ぢ大賢ぢろうく貧窮ぢくろう天ぢく盗跖ぢ大盗ぢろうとも。富厚ぢして達ぢく爾乃ぢ武運乃稽古もぢよぢく少ぢく緩ぢく怠ぢ給ふ事なかれ。

乃ぢ爾ぢろうとも善ぢすれ乃ぢ福おろ悪ぢすれ乃ぢ禍おろ乃ぢ。爾ぢろうとも必定乃ぢろうとも幸おろ不幸おろ。吟乃仕合ぢく

不定なるものなり。聖人と雖も定理を決知すること
能はざるゆえ。或は長命ならんと思ひ
て常に酒食を貪り、或は病ありと雖も養生
せんやおのれ職事を怠らんことを恐るるゆえ
養生をも為ずして夭死をする人あり。養生
よくしても長命ならざる人あり。養生せざれども
長命なる人あり。養生せざれば害あり
とはいへども養生をせざる人あり。不幸
にして病死する人あり。養生せざれども
奉公をも為し。養生をも害なしとはいへども
養生をも為ずして病死よりも奉公をも為ず
職事を怠らば、やはり愚罪せらるゝ。故に養生
やはり長命を

奉公おこたりなく。せまうよくせをも害なわんとハいつもくらし。
ときハ養生おこたりなく。酒食をつゝしみ。

やまひ病死よりまさりて。奉公おこたりなく。養生おこたりなく。
職事よろしからハ。やはり黜罰せらるゝもしれず。されバ長命をねがふ道。奉公をつとめ道なるハ元不易の理と
なり。各よく考へ見給へ。なかなかおもはゞ。おもひ半ばをさるもの
なり。たゞ道理のおもく定まりぬるよきそこを治んや。道理のおもく定まりぬる
わかせをもとめず。定まりぬるよきそこを治んや。道理のおもく定まりぬる
方よき。ハや治まりもし。たゞ理おもく極まりぬるハかならず
方よき。ハや治まりもし。たゞ理おもく極まりぬるハかならず
こうくわいなすものへし。されバせをもとめて。ハや理をもさるこ
とくも後悔なすものへし。されバせをもとめて。ハや理をもさるこ
とくも後悔なすものへし。されバせをもとめて。ハや理をもさるこ
とくも後悔なすものへし。されバせをもとめて。ハや理をもさるこ
まちぬるものなり。そこをよくおもひ。ハや理をもさるこ
まちぬるものなり。そこをよくおもひ。ハや理をもさるこ
まちぬるものなり。そこをよくおもひ。ハや理をもさるこ
まちぬるものなり。そこをよくおもひ。ハや理をもさるこ
と噬臍ともいふ。さるをハ過若ハ過悪やいまだ理のおもく定まる事なり。

聖人は教も。君子は道のおおきさをもって。吉凶禍福。天よりするものにあらざるなり。そんや道と人の善悪のまねをや。禍を得んとて善をなし。福をおそれて悪をなさざらんやと。おもうに孔子の人を教へ給ふを見るに。福善禍淫の治乱の事は。商書にあり。天道人に福善禍淫の応ずる事は。周易にあり。況や君子の身を全くして。名を後世に伝へんと思はば。悪を為すべからず。

天人相勝

論じていはく。人勝天。天定勝人。呉は伍子胥が

王闔閭をすすめて。楚国を攻入。父兄の仇なるを以て。舊君の墓をあらわして。尸を戮すると。伍子胥が旧友申包胥と

天人相勝



王圉圄をすてゝ楚國を攻入、父兄の仇をうち、舊君平の墓をあばきて、尸を戮すると、伍子胥の用意包胥等は、いかゞもてゆるすべき、衆勝天、天定勝人、元八伍子胥呉

てこゝろなきの善惡をこゝろとす。はたとも天定まりて人よ
り分とゝのふるの道行はるゝまゝ齒の天盜跖のつまの八天る
いふ定まりたるなり。其後天の定まりたるなり。顏回八一簞瓢
食一瓢の飲陋巷に窮居せしこと。其名今に日月と俱に並
て不載朽ちずして盜跖八聚徒多人天下に横行せし
こと。又死て肉醢に寒さるに名を空しく傳へられ
なし。善く遺臭百世にて秋毫も善として見
給へ天の顏回に報する事果して薄く盜跖に報する
事果して厚きやうなの上顏回盜跖のごとく善惡乃
報おそきハ稀なり。其外世俗を見るに善惡の報徴的なる

もあり又速やかにおそきもあれども。其多ハ及ひがたき
て後國家賊吏多く前後罪なおあらんこと。そもおもふ

幸果して厚きこと、その上額面盗跖のごとく善悪乃
報おそきハ稀なり。其外世俗を見るに善悪の報落的なる

もあり。又志ほどおそきもあれども。其身に及ぶハなほきも
て子孫国家賊吏多きに前後罪よわあることもあらず。
もわるいおそくも志ほどわるし。又幸あるに一生のごとく死後
志ほどもわるい、う志ほどよきハあるべきと云ハ。邪縣の租税金穀
の出納。斧を積むに限なく稠畳するなおその交互紛糾のごとく。金
銀の出入多きひわるくも。大ごとハ志を在き程よく小人を利欲
さときものゆえ。それをよき様含と乃ち。多く智を廻らし。
知そうな官財を私して。妻子をさすのやう。奢侈をきそれ
ともその跡乃ぐねねを。悔恥をしく自ら計をなすごとく
其内わるさまざまに罪よ行そうもあまねくも。そこまハ其人の力

くえうれしと。及く已が智よ自慢して。さまざまの懲戒ありくやうに。さまと刃をとりて。すゝる事の。法ある多のえれとやある。一旦そうこさるよ共場ふく。紀周くおようよはすこと。分餘屋も亂定よ漏ろふとなく後ハ。智も計も施をやまなく。その幸利忽よおの胜さまく。さきにまほらくのうことうくも。事よ落ちとの未おく。彼も元も終よハ免ろハ出ざ。志ハ風象のよおくうよ。大きなる不幸ハかのとくまよ実に俄よハ志と雅きそのいそもや天と西海風土を偏覆し。半億万ともなき人をしてくいく英大の下幸なのく。おとそれのよそれも。若とあ悪とをう限もなく入れまハ若亂七の軽いくまを急に捨るべき。まれハ業後不尚あを

く。治定せね事よやうよ是ハ我ほく小人の険岌行あく幸をもとしあやおやきしくうふうく六おと終よハ亂生

英大の下平なり。おのれ人の上に立ちて悪とす。限も
なく入乱るゝ。若過ち軽く急に極めき。されば兼度重ねて

のみ。すなはち人として天より勝れ。禍のもとである。小人は眼前の利を見て。淺ましのよろこびに。君子は永劫の害を慮りて。ものを懼る。詩に曰く。畏天之威于時保之と。深くこの意を保つべき事なり。

愛欲の盡きざる人

あるひと蔥嶺の教を信ずるに。愛欲の盡きざる人あり。この人の思ふやうは。其前よりまへを儒道のそむく事をすてゝ。釈氏のもとめに歸したるゆゑ。今より儒者を見ること。多くは糞有の相と泥と。世の掃



利のごとくに見よ。一生道よりおもひ。佛者は世を如夢幻と見れば。異端もとせず。佛性をさとれ。

名利ようたらく有る。一生過よ不思ぎく修ら行る。佛者ハ世を如夢幻と見ん。異端ふとせよ。佛性をさとよ。幸ひ此地よ到る人も多く。吉凶斜ふる縁のとく。ぞ。不躊躇を入る接るを見ま。浮世の有様すく〳〵愛ぎく修る。いく〳〵そよ心をとゞめき。一向ふ愛と思修ふくくて過ぎとゝ、たく〳〵急なくとく、前風て。なるかしのやうく〳〵ぬ。其、そゝきなきもおもひ。者よく〳〵高眠の士の儒を逃ぎく〳〵佛よ帰する八。其おもくくそ心よをきく〳〵歸〳〵きゝとるく修る。法の事かっ或人家よ依る八。さる家よ寃鄉食の設きおもよ。其座そく〳〵衆客もろともよ。そ当ぎ。其中よ一人おまよ酒食よ飽閙してそのそうさよたく

うきまくらぶやそく果報の腹を抱くゐほしお路よくも児の飢くく食をもとめなおやくおやなくおやと彼の身よりやつしは。かつおわるくきやくと我、とおうくくゐる今儒者世ぞおきゐ名利を、とりくく頭院の教をきゐほくおもふ人の酒食は飽くも児をこもむよ仏ゐも。ゐの名教中ま楽地するをきゐうさまふかつま。丈夫ゐ真と妻とおつま。夫婦ゐ真と人物よりもゐる妻かつま。天地開きそりよりま。三綱五常のたゐりてだも今ものゐるゐほさまふ夫婦の儀よりおくおく真、する地なつま、くくえ女とゐは倭とかるん。但世の人く。多くふ富貴利達を謀つま。毀誉得喪ゐ拘まはく。一生事業ゐ奔忙て日名倭ほこと

る程よ。怠よ住怠よ事つま。圖強さるよさくくもうさるよおそえふえ給ふ皆人欲よつまくそく妻かするものかるつま。妻よもいく倭

る程よく慈悲を施すべし。圖強なることをいさかひ
ふべからず皆人欲ふかくして妄執ふかきもの
なり。死ぬる時は黄金を一つも持行事なく空手
なきがらばかりにて行くべし。生ある内は
おのれ一代の事と思ふべからず。子孫の為
をも思ふべし。すべて世を軽く思ひ。真と妄とを
わきまへて。三綱五常をわすれず。おごりを棄て。塵芥
のごとく。あるべからず。物を惜み。耳わづらはしき物をきかざるやうにすべし。風雨小まのごとく。終日耳をふさがせて
聲龍となるといへども。是をきかざるがごとく。決して
腹をたつべからず。天下を安く。危難を免れんと
思はゞ。

謀を以て毀誉得喪に拘らず。一生事なく安穏に日を送るべし。

てこそその虛靈なる本を貴ぶなり今燈と幸とを二障と
もく二塵五常をさくすべからずもしこれをわすれ
ぬるものとなりぬれば
とる事無心とすべきやうこそその神識の靈妙なる相をそこへ
て本性の眞如とするわうもなんぞまたくらき火の光明なるをもて
火を物を照してこそ火とはいふべきなり山海なんどをあを龍燈
山燈なんどはよういふ火のごとくにこれをてらすものなれども
く消ゆる光のごとくに里遠く雪月地を向在を飛ぶがごとく
神火とてそらにうごくことは佛法世間をとわず後五倫五
常をそなへてこそ人事物理を眞
せとうてこそもちゐるべき靈覺なるべきなり自事は

推右よろしきなり。もしまた後漢の明帝よりおよびのときの人のごとく
ば、ただ佛性をも性とも心とも見とも性よ。

常ならぬまでに多く物作する人わざ人事物理を真
せさせて多くもちゐ霊覚あるわざ自事ハ



推古よりまへ。もゝあまり七年に漢明帝よりおよびのときの人わざ絶たるまゝにうつり。佛性ともせよ幸えともせよ。今月の妖術とうつくしく。ちるまよやまとの国ゝやくよ幸よ作るまく。そるきも早きもあまよ傾うねもや迫。或ハ者作とゝて父子と育く。古家通せするくし。由よる多くせんそうまぎれきく人ありなくく。真の道よ入なよとてうちやいのるくよやとおもやしきよくよ男ひ給ふ。若の貴嶺みもおほやもうちやうくよ長太身ま！ちくしくとく。前志ほうちく践祚ある。

鈴本葉う歌

すてうのいなもむし。注本のうちわいうくよ人ありおくる。

父一向に教法を後世よく儒を学ぶべき道の大意
をも知らざる人と同じて甚だ心得違の説なり
爰の世界の人ありて爰なる人と共に語りて
言ふ所を同意の人よく心得たりと云ふ時は
もかくよろんなれ共仮令ありてよろんやと問ける時は
言ふまじとて遠よりあるときは心得たりと答へて能く言ふ
ことわとはよもむかなることなり能く人の話をよく聞
いかゝことけなるやうに心得ざるやうにまたよく心得
そのごとくに向きるもなりてき今おゐ仏教を学ぶとて
よく法をとくさきよく前の如くに爰なる人の心得
違をとくべきなり

主とも。その恩とも。我子よりも。ましと思ふ。
いとしく。おぼえて。十二迄も。そだて。家をおこさせ。
八。其親切なる事。前よりも。倍して。今迄は。
猶ありやうも。もらして。其人と。ひとしくある。
若もしく。八。因て後の患。さへ。拾うと思ひ。霍去病の。
名のごとくおひ。ばくその遺體ある事を。忘れ。
其ゆゑ。はおよ。有信をも。忘れ。其人をもとの人なまもる。別人のやう
にあしく。言ひなし。有酒のうまさへ。下戸も。呑まとも。下戸共。もら八。
別のまなのごとく。嫌候のうまさへ。上戸も。呑まとも。下戸の。もら八。別の
事なのごとく。儒者も。仏道も。真如の奥かりて。實なる味を。劉伶の酒の癖を

ことに何ぞの候の夫を去るごとく。弥多よりの子よりも去ての外物よりも捨てき。実朝よまのよりくき。起るも臥るも動もせず。寄りあひもせず。うちむかひもせず。ありも生ける甲斐なく。皆死せるにも劣らず。禍福皆是かり。造次もてよを、辺。顛沛もてよおくをこれを忘れざるごとくなり。かくこそ。

翁もいよいよおもひ給ふ人よおもひ給ふ。徐本某もおもひ及ぞぬるを。同じさとをて。希命ぬをおくてそ。ヲは去ぬるやと、八よの名残なれば。

翁のうへの記一時

十四日松永某とく。徐本氏ら道学の友おもひ給ふ。其人翁のかの欲とくこうるやう。この月。うちよりわれ歌申。又七徐本氏のよやう。

とこうく去人の肉おくあるべし。

あさこの夜の花ときもおもひ給ふねよこそぬおてるもる。

とうく古人の詩にあるごとし。

あさがほの花にとまりて夕がほのそこねがほにもなるかな

世のもの、なにごとにもあれ、こゝろざしをとげんとするにハ、かならず人にそしられ、人にわらはるゝ事あるものなり。

易に松樹千年終乃朽、槿花一日自為栄とかける詩ぞ、其の朗詠にして風雅とすべきこと、栄枯をさとるの一端なり。

彭殤を齊しうするこそ、佗耳ハ高きやうにて、よきこゝろざしとも、いと淺きこゝろなるにあらずや。莊周の唾を、なめもせよ、逃ろうにハ、今松永氏のねがうところなるべし。



ゝ時松永某とやら、絵本氏の道ゆきぶりの友あまたゝびたのみの歌とうとうとの、月、うちよりわれも歌ありて、絵本氏のよめる。

ハなり。汝ら、若し、まさに死ぬる。汝ハ我が道を聞くべからず。死するも可なりとこゝろえて、男子ハ我を呼ぶべきに、我が呼ぶべきにあらず。ゆるハ我の夫よりまさに交るべき性なり。世よハまさに我をおもふべし。我ハ汝のごとくおもふべからず。汝ハ我を悪しと思ふ。我ハ汝を悪しと思ふ。互ひに悪しと思ふ時ハ交情なし。交情なき時ハ各自ら心を立てゝ相ひ離るゝなり。死の人をまつ後なきがごとくわれも同一事なり。我ハ汝をまつべからず。二人ともに死ぬるハ我のごとくなるべし。おさ、ごのごとくなるべきを知りて、各自ら性命を惜しむ

なるよし。経を机のうへにをさめ。うやうやしく一礼をなし。
とゐるを。第一にうつる人のよう。ゐなをよし。机と覚。うつくしきようわらん。



おのおの無常の地をかくのごとく一人も有ものなる故よ万物の霊
ハいくと。及く私智よ妨碍まく。いまゝ道をきゝうけてよりよる
ま〻を悟とさま〻八人ゝ道をきくときまなり。志のまとも道をき
くといふ。佛者の領悟のごとくよ。その時ハまとハそ物へうゑ。
乃ち物をよく事物当然のすがたなり。匹夫匹婦もこゝろまよ
ともよ行のこと能なり。真よ志ゝ八実よ行之。そこを故よ
学ぶ也。行く著しのち次。文を終るまでおきよ入れを。
なるよ悟入ゝるや。是。今道をきくとハまたかのやまよハおゝ
ゐ。奥の林を安んし。愚の林を
学ぶむとく。常よ道理を、のちとして。志ほとくも離ゝてゝ

なく、さてある限を過よもろびん死をまぬかるゝ事もあるまじ
あくなるべやをうち、一日、さくハ一月九道を歩行て死に、一月
いさてハ一月乃道をうちくらし死に、一年九々を五ヶ月
死をまぬかれてハあるべき道を用ゐず甚々乃死しても、緑毫乃
遺念なし。こゝをもて、おさこゝろも一月乃まのと、二と、
己ゝ定ゆまゝにあなくすき方ばかきて、さて日、つゞけを待慢くまゆ
まハ、何の恨ゝもあらん。松乃ゑもと備後ハ大きなるこゝまとゝいふ
まも天命をうけ自、こゝろわきもあらず、ハ同、うに、まゝにて松よ
うにこゝろねんとをいふなるまゝ松永氏もけふこゝろなるゝ
うに日ゝよろこゝろくハあるべしと、翁も此ゝ節よろこゝろ

天地のうけ一ぱゝ我ゝのおゝ人、咲ゝくまゝ
花

天地よりけり　ほとゝぎすそのよく人に聞もおさえの

花

おもかもと見るやハやよめおさえ入。さくと聞もも發

落を

それもさぞむさりらぬ我そ。おさえのれよこそらねんとハ

きらふ。

ほとゝぎす世俗よふ兒居（とそ）（うもき）

晴もくもるのさえ入。名さえ

おゝくれ行ほとゝぎす。爭初をすべて主我をきらふ。

不改不求

古事記人ゝ歌ゟ出ゝ名ゟ我ゟ出ゝ

中心養之。彼茁者葭。壹發五豝。于嗟乎騶虞。

騶虞。義獸名。仁心也。葭。蘆也。茁。生出貌。豝。牝豕也

いく度の月も、ゐ月もきぬ。さきだち月の往来とつくもあまとと
もよの悠〻となの。黄衰里びあるるく路をきてやなまに。我
夫の帰らむ程もうるわく、待つまくに来く思ふ
つくもとくきとつひく。英路よ。
百爾君子。不知徳行。不彼不求。何用不臧。是を夫は告やる
やうよ。ゐるよ。ゐるよ。ゐるよ。相思ふ程ゐるよ。ゐるよ。女の作
なき私のほなるよ。かけておもこそ使りてゐくたゐるとる。
そそよ。羈旅八よの例を艱苦ふく。おとれのをねるこもあまに。日た
ろの名節を損せらまぬやうおとそゐくゐるよ。そし。百ゐ
君子かのくゐ汝の来なるまに。申よ。おとそもとる。女ゐ。

ちょっとの事に人と争い人を貪ったりあざむいたりしてまでおのれの利益をはかるのは、たとえ富貴であろうとも、かえって恥辱であり、また災いを招くもとである。況や貧賤であるものが、義を忘れ、節を失うというのも、甚だ不可解というべきである。孔子も「路の敝れたる縕袍を衣、狐貉を衣るものと並び立ちて恥じざるは、それ由か」といわれたが、この言葉は、今の人にもよく当てはまるものである。

先年の遺沢、おおいに場末の漢にまで及ぼし、後世に伝わるまでたくさんの我欲、貪欲の心を改めさせ

ひとく恥さらせど叶待を汁くほろ酒ひとそうに、つやきたへ
へんやうき同室の婦人よさくつやれまを言ふれ人わるもやさきや

ら八先生の遺沢によるさ場さらばのさまやうよりも漢よりへ
後もひ作あるまをたくきう尽よるく我名八着よる秋夜のこ世
よ行くまでく聖賢の教わるまをきうひ好人のまへよ
場士大夫さらへ多く名利の境よりこ一生をくらして、うたにまでの
まをも、次程よ一旦空とときゑとくをきて八、とそるきやよたも
ひたく、そをそくく世と縁念して、分け活計とするのこやうそや
よう五倫と常をさくく空とこるやの三八、いのくく一等一本よぬ、のきれ
わるまやまらひさまへ杜水先のあさこの日を保するのを宗八通
をきのさら人のまるくきまよわ発を今前の不妓不求をとそく
杜よこのうれんとする八子路の孤貌をきる人をとしまへう

歌やさうて。狐貉も細砲も忘れはてゝ。ひとすぢに足ばやにのぼりつゝ。このやうのさまを詩よりもまさる眼朝人を。儒者の一頭巾なぬすとくさ。ものゝふなんどゝ。いとも和歌こそあるべきものゝ。京師和学の名家なれど。筆のすさび歌をきゝ。こゝろ。さてこそ。ものゝ人情よき家をとわきまへなるものゝ。くるしきおもひ。三百篇をうたふにたとへ。和歌八人のこゝろを種として。よろづの。ことわざとなるものなれば。なほさらのことくき。萬葉集をうたふにたとへ。もろこし歌の仏體詩の風格にわるべきなどとそれぞれ。筆のさきのよわきひとへ文字法師と成べし。

春秋乃あきそれ



こゝろ。ふかきものゝあはれをしらざる。是非極もやうくさまの

の肌體記の用捨はおのづからあるべきなどそれぞれ筆のまゝなるやうなれどもいとゞ文法なく候。

春秋乃おもむき

こゝろ深きものにおもひけるに至れば秋はいとゞさびしきものよ。當さく友をもとめ鳴く聲よりは行歸る雁がねを見ては今こゝにあらぬ人をおもひ出すなどいと心ぼそき折しも聖(きよ)絃する音きこえ、筆走りて同事をぬれおちるもとゞめよ花のとゞまらぬ枝なれどもおよびがたきものとおもひ、春の花ちるやうにきゝおとしたるとゝ紅葉は花なさけよりまさりおもしろみおよびがたきとゝ又琴をおもひ出すにつけ、秋の時雨のみよ林万壑さまざまの錦をさらしたるが如き。

今ぞよむ　ひくからすさへ義心の殺風景も議もわろくぞ侍る。

豪傑ならずとも　ことわざに山有木立則度之賓有禮主則擇之　やまに入ては　木立を度とし　人を訪ふには　主を擇むとなり　其時節　さりげなくもてなせと。

大津の宮の御時　大織冠より　佐々木の氏おこりて　其御末　秀郷　秀衡　秀義　秀綱　秀行　秀頼　秀信　秀詮　秀治　秀頼　秀信　秀詮　秀治　秀頼　秀信　秀詮　秀治

とゐまつ　ひろみなるもおまハ吉野の雲　龍田の錦を　汎仲
のろくおろくハと　豔陽桃李の節よりも多のてきけ

さゝゝき氣を受て。新の樂八揖讓よりもおるなり。其の實優くして春のなさる方より勝まさるなり。又く春の花の陽和の氣おるごとく。秋の樂八伝代のまゝおる故よ其の実慄くごとくして嚴なるさまよ勝まさるなり。又く秋の気共に實のおるごとく。八まさる聖徳とこひなるべし。新もおくほどく春も。秋も落きよおるなり。新よ比ずまハすゝ落さるごとく。それ故よ新八若たるごとく。古もくさねなるもごとくまハとく春も秋も天なるべし。天の徳よ同異むくとくまハとく。聖人なるべし。聖人の徳よ同異おるごとくまハとく。其時の同じうねなるごとく。新八古の陽和の時くおるべし。聖人の幸なるべし。古今の事共

風霜の時くおるごとく。聖人の不幸なるべし。されハ其程よ光を修むべく。所遇之時然爾と。ゝるおなじ。ゝるおなじ。ゝたとくと始終

聖人の徒は固異なりと雖も其時の困厄なるに至ては新古の陽和の時くあるが如く聖人の幸ひなる事



風霜の時くあるが如く聖人の不幸なるに至ては程子先生後学に所遇之時然爾と云るまわ是やけたたくと始終よく、かるまハ徒ら区々ハの異説を信ずるやと云座中よく人々も汗と感ぜり日く旅の若き比ハ書のいまく若きそうそうとしてくる日月のつゝまるを歳ともたゝむるをいふ花をちりさるをおしむ惑を解ぬ待ち初てそのまゝに名額をたきて謝するが如し

秘事ハ睫

さて往客ハ我等書を讀ざるなまねの性命を徒の従のごとく・其道を世法を修ずハ何ぞ世法

八別候なるのみやうよいと好くを得ないたらつ。すし初世の談よや
俗ものなきまるにきてたおうるやまをおもくいつそまもゆうき
を味わるまをそへ俗る。故よ秘るの八睫おくおおやちのきは
なくまるへぬのおくの初表留るとものを唇ぬおくの米し義そのる
おくいれ孔子も霖の適言を多く好よおくし大和を称好一字。
さまを八匈奴の言も聖人へ擇馬ともやおくいむり孺子おおて。
滄浪之水清可以濯我纓滄浪之水濁可以濯我足ヲ
歌ひたるや欲のうちを八生くく聖人八不凝滞於物。世と推遷る
のさおくかく歌まおくもおおてうそまを孔子きく好く。水すも
初よ八俗をおおひたる濯るおよ八足をおらよ。己縁をおおひそうも

ひくをおくそうくもそもの月のうちれるのよい小子よくきりとの好
へひまさ八業厚福福えな藻えまを生よ。原くうおくとうまる

のそよかく歌まくもあやしくそときゝ給ふ水すも
ゐよ人後をおひ乞ふ人足をおらよ乞縁をおひとらも



ひくをおらとらもろの月のくもるのかなよ小子よくきけとの給
へよさきに栄辱禍福えや藻ときゝ生死取捨とらまるけ歌
ゆきとるべし仏の多く人とうつもりてよおとゝもむよ
ちくはなうつるべしこゝを初の歌とくおたくきゝゆきまよ仏
歌ときゝ前ワつゝ時宗師よりそゝの老儒あゝしうゐる
きやすくお月えくゝ給へ
東照宮御生世の時れ多のワき老よ汝等ゐ対をゐもつよ
簡要(かんよう)と語(ご)おゝよ文字おくいもおゝよ二字おくいもおゝよ仏
をきくゐきそと給ふまよ法をきゝ東照宮世へ文字おゝ
いくうをとる七字おくいそ対のわとをきゝ汝等ゐ乞を学ひ志

ろくろくとよき意おもふことなやむ。当世の人たゝこゝろその日をくらせり。其の行をこゝろにかけ、あるひは家の栄華（さかえ）をのみ願ひ、物たらぬ事をのみ歎き、或は諸侯の家老にのぼりて、ひとかど万石以上の分をおもひ、共に国おさめ登城の時、おのれも供揃（ともぞろ）ひをいかめしくおもひ、路次（ろし）やかましくおもふ。其の行ひ公儀の御法度（ごはっと）をもかへりみず、或は芸術の上手（じょうず）にならんとて、日夜に稽古（けいこ）をつとめ、それがために大切の家業をおこたり、或は親類の家の物頃（ものごろ）を羨（うらや）み、其の上の望（のぞみ）を願ひ、威勢（いせい）のさかんなるを見ては、我が身の行末（ゆくすえ）をかへりみず、其の威勢をうらやみ、我が身の分限（ぶんげん）をわすれ、あるひは武芸の上手にならんとて、日夜に稽古をつとめ、或は諸侯の家老にのぼりて、ひとかど万石以上の分をおもひ、共に国おさめ登城の時、おのれも供揃ひをいかめしくおもひ、路次やかましくおもふ。其の行ひ公儀の御法度をもかへりみず、或は芸術の上手にならんとて、日夜に稽古をつとめ、それがために大切の家業をおこたり、或は親類の家の物頃を羨み、其の上の望を願ひ、威勢のさかんなるを見ては、我が身の行末をかへりみず、其の威勢をうらやみ、我が身の分限をわすれ、

武芸は格別のおもわくは結構なことなれど、よく考えてみると一番むずかしいのは家内のおさまりかた

了依(そんぞん)勲麗の家多く物須多(ものすこぶる)若(もし)美食十皮(ひ)多く衣(き)るこの猶(なお)威(たけ)せ一ら今尚家中よりき程の今もく猶威を八ちわよ発(だ)ら也。

武具八格別のおわりまハわく八結構よ志(こころざ)しるかるを了孫(まご)ハ十一ツよりよく初(はじ)めて馬ニ乗ると一番ものく家久のおしへ者(もの)ゆえ其(その)比(ころ)諸侯の中よ世よ賢君と称するわけ一ツよ其家老共よ子(こ)の年(とし)ハ十一ツかるゝ時(まき)繪よ印籠よ大きなる珊瑚(さんご)樹を緒志めおいて腰よさげ名ると其(その)君乃(すなわち)とうめらを他(ほか)の其人(そのひと)へおへよひく決八下箱を好むとうくしたく下箱を菜をとうくしたものをそなへさけよとく更ねり下箱ニ本膳(ぜん)ニ本膳ニ汁ニ菜ニ引(ひき)ものニ吸物ニ猪口(ちょく)ニ平ニ焼物ニ香物ニ飯ニ汁ニ菜ニ引ものニ吸物ニ猪口

華麗をきわめ數寄をつくす。何の事もなきやうなれども。おのづからまねのなき。古き人のうつし。大坂夏冲陣より。將軍家惣陣を御巡見の時。なり多作濱ちかに浜惟子をうつて。胄うつぶかくを仕せらるゝとなり。又加賀の家臣に山崎長門といひし名ある武功の者あり。後ち祝髮をつくし。閑齋とそいひし。前真子孫なりとぞ。この軍秋大坂生玉の時。せつぱつく紙子羽織に撓九のわるものるわをつくるを其まゝ着うろわ。元ゐ名ある武軍装の好きまを着し。況や平服の簡飲食家作等の善美をきわし。費をつくすかけうきまなるべし。古より太平升熟へうわるといひなうら。おもふに私欲より起りて。上の用をたゝず。公儀を恐れざるより起るべし。

城改をして。八代作刀は數世國まで七日より非なるべし。但其古源

飲食家作等の美衣をたくし。云用のる以金銀を費をそそ。
はうきなる。右のやう太平升樂うおると。いひなうう。おき

城攻をして。凡俗の如き敗亡國まも日よ服なる人。但其本源
をうと私欲よりおきて。よの目をたゝ。死れ程をあるよりよる起るも。
東照宮そうをかしく思ひて。玉くそ修おうとなおもも。但古
の驕(たかり)とう病ハ。上下ともおるるおく。ひっ一刀の奉(ほう)ま限うん。
右のやう。我國の時を修る人。自うう漆くカを持(たの)て敵(てき)を慢(あなど)るは。
必國を失ひ分を滅(かろ)をその例和漢ともよおけく勢ふうん永祿
天正のおろおくいたく。今川氏真武田勝頼おうとうん。いをほもと
おうのやう目をまくう分の程よりくく。等一旦の強きよいおる
故よ。後のおうやう滅亡(ろぼう)をうれおのれるき所目おくれ後おうそれ
料分れよおくの法ひ一事中もおれう。さまハ冬二のよう起らせ

於此成就。是名為盛。如是等句。皆名為序。序
如次第。作前後義。次第前後。皆名為序。如阿
闍世王。將害父王。先來問訊。是名為序。序
有通別。通序者。如是我聞。一時佛住王舍城
耆闍崛山中。與大比丘衆。千二百五十人俱。
菩薩摩訶薩三萬二千人俱。是名通序。別序
者。如阿闍世王。將害父王。先來問訊。是名別
序。通序別序。皆名為序。序有通別。通序者。
如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與
大比丘衆。千二百五十人俱。菩薩摩訶薩三
萬二千人俱。是名通序。別序者。如阿闍世王。
將害父王。先來問訊。是名別序。通序別序。
皆名為序。序有通別。通序者。如是我聞。一
時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆。千
二百五十人俱。菩薩摩訶薩三萬二千人俱。
是名通序。別序者。如阿闍世王。將害父王。
先來問訊。是名別序。通序別序。皆名為序。
序有通別。通序者。如是我聞。一時佛住王
舍城耆闍崛山中。與大比丘衆。千二百五十
人俱。菩薩摩訶薩三萬二千人俱。是名通
序。別序者。如阿闍世王。將害父王。先來問
訊。是名別序。通序別序。皆名為序。序有
通別。通序者。如是我聞。一時佛住王舍城
耆闍崛山中。與大比丘衆。千二百五十人
俱。菩薩摩訶薩三萬二千人俱。是名通序。
別序者。如阿闍世王。將害父王。先來問訊。
是名別序。通序別序。皆名為序。序有通
別。通序者。如是我聞。一時佛住王舍城耆
闍崛山中。與大比丘衆。千二百五十人俱。
菩薩摩訶薩三萬二千人俱。是名通序。別
序者。如阿闍世王。將害父王。先來問訊。是
名別序。通序別序。皆名為序。序有通別。
通序者。如是我聞。一時佛住王舍城耆闍
崛山中。與大比丘衆。千二百五十人俱。菩
薩摩訶薩三萬二千人俱。是名通序。別序
者。如阿闍世王。將害父王。先來問訊。是名
別序。通序別序。皆名為序。序有通別。通
序者。如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛
山中。與大比丘衆。千二百五十人俱。菩薩
摩訶薩三萬二千人俱。是名通序。別序者。
如阿闍世王。將害父王。先來問訊。是名別
序。通序別序。皆名為序。序有通別。通序
者。如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山
中。與大比丘衆。千二百五十人俱。菩薩摩
訶薩三萬二千人俱。是名通序。別序者。如
阿闍世王。將害父王。先來問訊。是名別序。
通序別序。皆名為序。序有通別。通序者。
如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。
與大比丘衆。千二百五十人俱。菩薩摩訶薩
三萬二千人俱。是名通序。別序者。如阿闍
世王。將害父王。先來問訊。是名別序。通
序別序。皆名為序。序有通別。通序者。如
是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與
大比丘衆。千二百五十人俱。菩薩摩訶薩三
萬二千人俱。是名通序。別序者。如阿闍世
王。將害父王。先來問訊。是名別序。通序
別序。皆名為序。序有通別。通序者。如是
我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大
比丘衆。千二百五十人俱。菩薩摩訶薩三萬
二千人俱。是名通序。別序者。如阿闍世王。
將害父王。先來問訊。是名別序。通序別序。
皆名為序。序有通別。通序者。如是我聞。
一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆。
千二百五十人俱。菩薩摩訶薩三萬二千人
俱。是名通序。別序者。如阿闍世王。將害父
王。先來問訊。是名別序。通序別序。皆名
為序。序有通別。通序者。如是我聞。一時

備前ごしらえ刀物の目利は長しといえども、この或時金弐両のあり
刀を刀屋に売ハ相州正宗なりとて、なかなか弐両ハ
あるまじ。半にしろ弐両と志津と刀屋に売ハ正宗
ならずとも、やはり正宗なるべし。此よし聞けば
よりも、刷毛目よりの中ごしも正宗なるべし。
此二刀を持ち戻りて、刷毛目よりの中ごしを取て
ハとおもえども、持ち戻りて見れば、志津と
こしらえ刷毛目よりの中ごしを弱き見
ゆるとも正宗と八思えず。かくの年始の礼は右の
ごとくにして、二代なるべし。本の泳右の刀を持
もし世話をしたる二代なるべく本の泳右の刀を持
来たらば、此頃の刀はなくして正宗なるべし。今

文先君行周利のごとくなり、法をも聞くことを
家老よりも其子細を問ひたづねて、其のふかきを
ず俗男女後生をもつぱらにおもひ正宗よりの
この家よりも多くお入りたり老人おほく常に念誦打(ね)して
後生疑ひのなきをねがふ我等も経文後生の
ねがひをこそ仏は今この経にやうやうおほく
そこにあのおちんぢの分として俄(にはか)に仏になんと祈る
へばやうやく仏になりまいらせ。仏になんとなりぬべき
き人よりの経すてと祈うつしよりも多人よりなほやうく後仏を
祈うとく仏になるよりもおほくの法をもとめてとく



ごとくなり彼刀もちくして正宗より銘よりもんと刻
行よりも正宗よりもちくおほんでそのきよりも深

き人よやの酔すこと称うこと十よ義人よなやまく後佛を
称うこと仏よするよ多のまおりくーや依すこと称すこと

ゆえとはいかよ。共相をば八ずまちの年もてなとおよそちうひゆます。それおやうそおてあきれの年おくゆかるゆえといゆよ。其時ちう義士共ますやくひ。六きるちうひゆくゆを急よおやうそうをきゆひおうそもなくひ。先すゆのれ年多うこうやうそまで、くらせくそまそのそよそひをうそゆやとて我ゆ孫うひゆとゆうそ。相くをおなまけくうをはしゆわ。彼花八の佛の孫うひやうとゆけうち士の年七孫れやーと川ますなそ、ゆきもる遠よ周をうけを分れ年をうそる。甲返なる下おうよ漸くよれそと得するく、小くハ南度のそのなき拘そそのやうなきをゆよくハ

まことよ秘すハ睫やくて年約を。もおくよそ学ふ耶人を周おくよすれまおくハ約まを。多周なりまたっ

まことに秘すべし。睫（まつげ）ゆえに睫を結ぶ。もとより一物なり。

是（これ）おのれよりおのれを見ざるがごとし。古今を明らかにし、人の行ひを見るべし。おのれ見ざるときは虚（きょ）妄おのれに過ぎず。おのれ見るときは鉅儒（きょじゅ）と称する人もそこにあり。おのれなき処は今此世界鉅儒と称する人もそこにあり。おのれなき処は今此世界鉅儒と称する人もそこにあり。おのれなき処は今此世界鉅儒と称する人もそこにあり。

後も世よりてそやすまじきく。自分おと聖賢のやうな
異なる人ありおと分外なりとおもふまじきなり。
一元気の外人も倫もるおもふまじきなり。

仁八心乃、のち

ある時例の人くそもひおもく降参(こうさん)しまいる。仁義(じんぎ)の
徳よ及ぶおと申よ初めおと人も天地のんと情
くつとおと天地を万物を生ぜおものくつとすなり。そ
きと得くつとすおバ人と人をもするおとそくの徳や
ずおと申句後なり。よおとくく仁八心之徳(そくのとく)之性(のせい)とい
ふ。死徒(しと)とおもバ仁義禮智(じんぎれいち)諸(もろ)もに仁ふるくまおよき程。

仁八心着を包くく義も禮智も仁によりくく立ちて。そバ前
の講次おくかひくくまおくく修。但仁を人と

仁心者を包括し義も禮智も仁よりおこる。その前
の講説あくまでかくのごとくまでなり。但仁を人と
するよりおこるとも。人を多く慈愛を生ずるとも
知るべきやうよりもとも。たゞ人を多く慈愛を生ずる
ことをつくす仁と衆善の長とするところを將ゐる
ゆゑ仁慈愛のさきまとゐそこにおのづから今
仁と名付けたるやうの一事の外に淺きものゝ名付
わるまじくいつまでも仁慈愛名づけるべし。義も禮も智も仁
のやうにつくす義も禮も智も仁なるべきあるべ
き名付んと工夫すべきまゝおくべきなり。今

ゑてその父、前風ニ逢ひ、今やさらに帆すでに
支へがたきを見て、刀を取りて帆索を切り
も、船ともに覆らんとす。ここに於て父、
大きに叫びて曰く、我死に臨みて人の元氣を
もとめ、人の元氣を脉よりも甚だしとす。我死
ぬるとも、汝ら脉をとるなかれ。汝ら必ず
活物を得よ。人は活物の氣をもとめ、活物
多き処にゐる。人よく父母を思ひて自ら艱難
せざるは君長を思ひて自ら勉強する教ゆる
ゆゑんを思ひて、自ら遵循する教ゆる
ゆゑんを思ひて、自ら遵循するゆゑん

次義を聞くに、必感ずるの心を起さず、不義を聞くに、必恥るの
ことを知らず、悖逆の義を思ひて、其ん頑愚として鬼

次義を闕くハ必慙ずるを恥を知ざるハ不義を行ふ
ことをもとめ情なく義を思ハざるハ甚しき頑愚として鬼
畜木石のごとく痛さ痒さ辱しめさへ何をもとめず自ら
しらず恭敬せず義を闕く感ずるの心なく不
義を闕くも恥ざる事なり多し。それをもとめずして仁義
礼智、信までも全く失徒ものにて各甚だしきにも甚幸
福をこれ求ざるハとして不仁なるハ義も礼も智も甚
だしきハ其国をうしなひ其家を亡し其身を殺すに至
ハ莫大徒よりおこるハ必然なり。その故よく仁を究理
徒を、そだて義礼智信を究理をもとめざるハ徒

なかきよをおもひあかしつるかな　其よは侍くさ〳〵ものの
物語などして夜ふけ侍ぬれば　御簾の内に入給ぬ
　　　

家高ら扇の的を語りて、平家亡びて天徳寺まうで、
決数行は及ばず、後日は家長が舅平家に

おくれ、人より先をたゝさまなれば、必討死せんずるものぞとおぼえたり。頼朝よりこと次第きこえあげられ、其志をあらはさんがために、なのめならぬ馬の、たくましきに、ひかせてぞ参じたる。是はおほくの馬の中より、ことにすぐれたるに、一騎陣頭よりおしよせ、馬を海中へ乗入れ、的よむとつゞくる。深手負ぬれば、家鳴をたてゝ、うつぶしにぞ射倒す。なのめならぬ名馬なれども、馬とともに、きり切れ海へ入むとせしかども、引てぞかへしける。武士の名をおとさじと守る物ぞかし。某八歳より戦場へ臨て、高綱宗高二人ぞ、鎗をとれ、左のまなこを両時に



あてゝ、ひやうと射ければ、箙より流るゝ矢、多くさゝりたり。左のまなこを射られながら、

名をおもひ

ふべき武士の名誉なるおもひをなし。某ハ無二戦場を除て
ハ。高綱宗高ふたりの鐘(かね)をきゝたるおぼえなし。左のごとき時も

あるべきやうなし。扨又涙ハ多くハ出ざるもの。もつとも
名ある武士などのハ。なみだをかくすやうにするものなり。
名の武をもつて。多くハ一旦の勇氣よりのせつなく真實の
出るものなるゆへ。なみだをかくすやうにすると思ふべし。それとおなじく頼(たのむ)
こそ心と。この八。誹(そしる)ハ惑(まどハ)すく辞(ことば)なるゆへ。ことばのうつくしきに
天徒寺ハ武をもつて。お主(しう)のおよび仁若(にわか)おもわれ
よび。武の一筋ハ仁なる根(ね)さして惻隠(そくいん)のこゝろの発(おこ)するをも殺(さつ)
殺(さつ)に武を救護(きうご)のごとくおもわるゝ通なきまゝ。仁と武と
つゞまりわるやうなるきとく。仁ともおもふハ真の武をおもへる況(いわん)
や其條(そのでう)ハ武をもつて忠義(ちうぎ)を。

文通ぜざるに、肉をもて流通して潤ひうるおして疎通するにおひさまざまの真ものよおもひ、見則おのおのこまごまの物の義をもちゐるのごとし。すべてもろもろの言行ともに義理よりいでざるなく、毫ひさうのごとくに出ざるなく、天徳寸分をもそこなふおそれのごとく全きものなり。仁者といへどもなほおのおの義をもちゐるがごとし。

（義をもちゐるがごとし）

在中記にいへるごとく徳をもて物にほどこすまいくりを余はきて彼の心義をもて四性を包括し、四性の中よりまた義をもて仁を掲げて仁を義にかへりみるに義も仁によりて次第大切なるものとみえたり。

序は義字の意をもて多くこれを論ずるに、人は仁義
おのおの天より陰陽あるごとく、おのおの易中の立天之道曰

序ハ義字ノ意ヲモ多クハ含ムト云ヘル句ハ人ヲ仁義
おほゝ天ヲ陰陽ヲ有ルヨウナレドモ易中ニモ立天之道曰
陰與陽立人之道曰仁與義トイヘリ又ハ軌元ハ孝ヲ居テ
四時ヲ統スルヨウナルヲモ秋ハ肅殺スルヲ以テ愛生
ノ功ヲナスヲモ知ル人道モ又カクノ如クニテ仁ノ四者ヲ包
含スルヨリ一向ニ自愛スルトイフヨハ非ズ義ノ裁
制ヲ以テ仁生道ヲ擁シテ仁モ亡ビヌ様ニ為ルヲ以テ
務学ノ人ハ仁ヲ行フニ義ヲ以テキリヲツケ事ヲモ心之制
之宜ト云シ如ク仁ヲ以テ事ヲキリヲツケ事之宜
キヲモ知ルヨウニ為ルヲ以テキリヲツケ

なる故よく仁は心之徳愛之理とあれども其の理すこぶる
徳かたく此のまゝと思ひ例すれども八日用事其
くよりて取與去就の分ち多く倉糊不斷のんをおもふ
ゝ、ゝく道理よりきはめくきびしくまことに学問して苟且
因循ふく行ひ敏とあたらの心遊を改るよ各かて若よ遷
る事速からく又ひの事をよく徳よすむくきやよりて有行
よりくく死きをわる我下地とすなおすれよく君よ仕ふる
編しよく義以為質とその給ふを又坤の六二を論しよく
敬以直内義以方外とのたひ又周達を編しよく質直且
く好義とものたまふ「是をよく義の簡要なるまをもと

多くの人の害をおは仁義の仇とするあるは私欲
おふつかよ邪智よ誘き不物よ引きく系の仁井住おわ哀

敬以直内義以方外とのたひ又周達を論しをく賢主は
く好義ものたつて「それとをく義の簡要なるをもとむ

多くの人の害をなす仁義の仇となるなり私欲おろかなる邪智を誘き不物をひきく糸の仁ありわ哀をもつてをくすなる施も忽よろこんでをくをねも其ためにかよひをくをく欲月よ歳よなるそう多とへ本我儘の轟るごとく兵生氣絶ねまへ喬木を枯槁す同しそまつのをきをも死なをけ義もをけ
ようと身をくなる処きるとへ刀よさしのまするよう芸そうの腐ねまへ利刀も複鉄よ同し其仁七ふまへ義と一時よそひく多くわらねねよなるそのあのおよ孔門の学仁をもとむるを要として仁をのとむるよへ私慾をもとさまへ

顔子仁を克己復礼を以てす。礼は天理の文人事の儀則とす。然れども我を捨てて物に従ひ、枯槁なるは、一日も礼を務めず礼を復すれば天下仁に帰するが如し。礼乃ち天理流行にして、仁全体の名。但顔子ならずんば天理人欲の分を判然として毫釐の差なきこと能はず。進修の用を同じくして其の学ぶ者も、念慮行事皆よく天理人欲の分を真知して、克己復礼を務むるを以て学とせざるなし。孔門の教は博文を約礼より先んず。大学の格物致知も、心を正し身を修むるも、皆仁義より礼智を明らかにするの謂なり。礼智明らかにして、仁義より出づる所の理なり。易に聖人の徳を論じて、知崇礼卑とし、中庸に天命の性、礼儀三百威儀三千とし、礼記に礼は理なりとし、

の教を博文を約礼を学んで大学の道に致知と誠と正心と修己と安人と仁義と礼智を

仁義よりの外なし。易に聖人の徳を論じて知崇礼卑とやいへり。知崇ハ天なり。禮卑ハ地なり。いよ〳〵崇ふとぶるを卑しくして成始成終の道なり。損益の張弛知礼とともに教をなすべし。禮威儀の移わたすべきをいふ。損益よりも限らさるべし。濂洛関閩の学ハ格物より起きて終に持敬よりして礼をもとゝなす。故に孔門の学ハ若干の法と思ふ。

落絵の氣

第幼ハ如何せん時世ともにやハ今川乃勢ひよみがへり仁義禮智もの風もなく徒道廃絶しかゝるに我今ハ何ぞ学ハ若干の法と思ふ。

へ神と。此一云々不思議ようひわく所まで。名をも
いつくし。さて仁義礼智、ほまも大切なる中よ。仁よ深く
義の大切なるまで心(こころ)を浩然(こうぜん)の氣みくよく考へ。
浩然の氣と云ふ天地の正氣塞るといふよりも
まで。名考へく見給へ。ふくと盛大なる物かいふ心八
義ふくまするやうのやおもひん。八天地の正氣を得ると
浩然ふる物ゆへと。私欲おつゝみ此きをなくまする
ゆへ。其氣いきやなくもをくいさくなるまでおくひさまは
浩然の氣をふさきまよまするものよ。おゝ其氣
なきゆへのくをおゝて。世俗よ半井一さんといふ
ものせ。調子よふくなとくく。一服よ物を決り
ふくと云ふ。其八真ゆきまよおもひ。又大よ氣をそだいな

浩然の氣をやしなひきたりよく生ずる物と考へ
なきものゝやうにて世俗よりは一さんとくだりも

強ある人。但氣よく心ゆきを勝たんとする
よく體逸さゝ去ることまゝあり。あるとき二人あり。拂
意のゆく事ゆく。拂曉よりゆくりなくも心わくせき。同
く起るよりひとりとゝまりて。氣痛くおくるゝ。ゆくり
なくもとゞまりて。氣痛くおくるゝ。ゆくり
ハさしも氣まゝの世界速よおく。其あとゝいふと同じ。意賭
の強弱よるゝ。おもひのすゝやうに起る者ゆく。よりあり
酒氣わきいでゝ。氣よく心のきゝを勝たんとする。古諺とす
ちうあり。浩然の氣と義よりとして其生ずる氣の又
義を助くるとおゝいと奇妙よりとゝ。佛父母のごとく
其雜位の中よ神祇のまもりをいふとゝぬ。祇と猿と靈異

なる物。氣を噓く雲を生じ又雨の生じ物。氣よりて
月日よ落り陵谷を泪く雲よ祇よりて生じてまた祇の

義を明らかにせんと奇妙よろしく行かん幸韓文などのごとく
其雑説の中より神話のまをいふまでぬ話を抜き霊異
なる抱朴氏が氣を噓く雲を生じ又わが生まれ出でる
月日より陵谷を泪く元雲を起こして雨を降らしめ
変化ともなくはなはだ荒唐なれども今浩然の氣はかくまで
て又かくまで我明らかなるにあらざるやもっとも
氣力をもちひくよのときを強ちと。むかしき我盈ことする
いそあり明皇まれにこの事人の苗を抜く長すれの類か
ずして氣力の生路を妨きたる大きよ集義の害を貽す
ものなり多くの如く化為もなく集義をまとするにあらざる
必有事焉ともよくいふ人なのかをさすあるに緊要のまま
おまた朝夕をもよくつとめよくすくおうねなのまそのごとく

集義するハ必定一事ありてのち必字最刀ありてのち一定する
ものなり志のミ小おのれ世ニ出ハ急ニ助長せんとし助長せざれハ
忘る勿忘勿助長ハいふまでもなくかのミとゝすれバ忘れ
しせず助長ハとせざるまでゝかゝる事ハ決してなすべからず
よつて又そこに持敬の法を論ずるハお敬もまのあたりよく
うかゞひ、こゝろをつけ敬をつゞけ倦ざるやうにしてゆくなり
わるくすると志のミにて敬ハ執泥ニ陥ル心をもつて拘定すれバ他病を生じてその害忘るゝよりも甚し
朝鮮の李晦齋のいひやうハ鶏卵のごとくわるゞとし

勿忘ハ手にとるごとく忘ざるまでハれおとすべし勿助
長ハ力を入てにぎりめぬやうに握てもつまでハ推て潰さゞる

を志すに苟定すまじ他病と生じてその害志ろこよりも甚し
朝鮮の李脇齋のいひやうよろしからざるがごとし

勿忘勿助長の八字を常に握てわすれぬやうにもまた握てつよく
急ぐの二を體認すべし持敬の法を志すにこゝろを
存心集義二致ずよく持敬養氣二法あるべし
肝要深切なる工夫なり

敬の工夫

座中に敬字の義を程朱の最詳明親切なるを
もとめ敬の字義を熟玩すべし敬の工夫は其の老少一生
くるしまず勉強せずして自然と久しく積累して
となり勉強せざるときは忽ち怠惰に流る

まゝ人にも従ひ。但往来共に行ひ易く。吾
憲法學者ゆゑに此道に心を用ひ。学問
及び経書の文義を。前人多く常
人のごとくして。治術より引き離し。多く此心を用ひ
ざる事にて。つまらぬ事ばかり。敬を以て
のぞむやうに。身のまわりばかりよく。また用ひ
かたもやうよく。敬をのみ主とし。此前の論
語。よく読まやうにも。治むる事ばかりやうにも
よみ。又も易しく又深く。各己が身に験して又深く。主
無適也常惺々法も此外はなきやうに。新



しきや。孔子も。天下を治る大切なる又多くの
ものゝ外に。孔子もお合無時莫知其卿との

よりても易しく又久く続く。各其処其分に験て又能く。主
一に適し常恒く法もまた分よりさまざまに多く新

しきを得ても。天下よき政大切なく又必政多くもち給き
その本はいかにも孔子もお入意時莫知其側との教へを
よく其を政大切なる処也粗略よりて。玄政維持とのをん安く
存知る程よく心放逸するよりて諸悪も起て。まずもやみ
そう。志つきハ敬をその大切なりてわすなきあるの時の心
かくの古人の執玉捧盈よるくてもきずするてもと今也
寶をそ。盤水の盈る、我捧けはおこりもも我ゆるさん氣
をゆるさるかくおもはん。其心かくなをもちて持敬とくなな
ずもさまとおもうハ、とおなかん。盈るも捧をはさけなん。古人執
かくく捧けまく考えて。ゆくそしてよるくやむきかもわれ。

いたりて神妙霊治する事多し。
くの為すくはれるものあり。八人は接するに
ふるえ。さしあたりて障ることのすくなきを以て
彼の務めたまふ氷のたとえ。無根の根をきき
ことさまをおそひ。すまにおそひ麻ひそうたと。
荀子八気を偷心と云。釋氏八苦を流注想と名く。気
永くある。此持病なり。今翁の此むき我真垂あり。
ゆうねやうたとえみを療する主方とせんて
次とくのそこに屬するものなり。此むきの時ぶ
ささき礼をくる。黄勉斎の、ごとくやうに

一炬の火をたとえ。其事を除くに火をそれときえ

火とくんで火を屬する地なり。これむさ心ざしある時を心ゆ
かさき礼をくゐるよう多くは。黄勉斎(くわうべんさい)の、そもそもやうよ。

以。其用ひやうハおよそ孟子養氣の法よりおほきく
かつ孟子ハ我よりさきにおとくらく。其氣持敬ともに必有事
焉とハいへども。もとその功夫おほきものなるゆへ。いつまでも
養氣持敬の工夫を專ともうされ。ともに本 其面目
なきハ鳶のとび梟のおとるやうに。同く猥在ゝの高慢ものを
とりてハ。ともに我離まさりて居るおもくのみなり。
ゆゑ毫髮もかるゝハなうるも。志のほか忘るゝハその有事ゆへ
ち忘る。助長するハ公氣力を用ひ。志あるく他為を忘るゝも。強て
他為もせず。其間やく月後の天機と月得志く持敬の法とを
ふり。若加ゑよおもふ時。おる女人持敬の法を用ひ。お前持敬の



法をおもひてそよおもくき。其大略おもひ。爰くハくゝを悍馬
のごとく。持敬を悍馬を御するごとく。我氣ありて。韁よく韁

仮為もせで其間ゆく月日の夫掻を月得もてく持敬九法とそ
ろて若加茂よおもて時おる士人持敬九法を用ひ給持敬の

仮をおもはずて乞よおもくき芸大略おもらく為くへんもそ悍馬
のもて持敬を悍馬を御するごとくもて我氣為もて韁よく韁
ゆるふ馬駈おもて浪駕九患おもて乞忘もてなおもて、もてく力
よおもく馬を割ひたぐ韁をたてくりもてく馬九を痛むもて、
馬なつもて苦もて、ゆくゆくゆるすおもそぬ乞助長するもて乞
為くおもるのもおもらん及もて馬九邪氣をもそ乞後おもそ
のもてすもて乞おもて後くもてにもそのおもて非徒
無益而又害之もおおもやもて、もてく磬控中を悍後急行よ
かもへおのもてもて進退疾徐為く我んよもてく乞自由もて
もておくおもて乞もてく持敬九仕をもて乞見もてく乞や

千年よりこのかた。其間一人も。今ハ苟活ともおもはたゝとく。旬感愉つゝゆるくゐこと。

民ともに老乃天

わが時論語卿黨篇の講説ゐて。その武夫版者ニとある。をそのゝく。豹備客よ對て王者以民爲天。民以食爲天の意。いと。若しゝく思ふとハ。在中ゐとゝ。民ハ邦のもとゝ。民ゐるをハ邦存し。民没ハ邦亡よ。邦の存亡ゝ民よおゐて。故ゝ老ゝ常よ民を尊て天とゝ。食ハ民ゝ命なゝ食を得ゐハ民ゝ。食を失ハ民死ゝ。民ゝ死生ハ食よおゐて。故よ民食をそゝるゝ天とゝゝ。ゝゐおゐゝゝ。

よゝ。あをよきさゝゝゝ。元ゝ二句ゝゝ。不給農をそゝんする。我主意ゐゝゝゝ

主忘飢也。人君不勤稼穡。不知小人之依。又五穀不生。人無所食。天下豈有不亡者乎。故曰。民以食爲天。言重穀也。

食爲天。王者所以治民。民以天下爲家。故曰。食爲天。

王者不務修德。而務廣地。不務節用。而務廣欲。則民困而國危。

王者不務德而務廣地。不務節用

すべて、かくまで耕作を粗略ならしめし風俗の本治
亂れ係るまゝ冬其ゐ情をやぶらむ。こゝ代の対ふよ
民をも〳〵天とすれのつゝあるを。租税を薄し凶歉を極ひ困
厄流離をまぬかるゝまなすゝもむ。よりて列聖の民土著こ安ん
農業をとゝめ。米穀をあつめて君よゝ奉ゝ。食をとゝて天と
せざらんやの。こゝ其風おのづから市朝中も移ゝ。こゝ士大夫を
そゝめ商賈等まで天根勤倹おして華奢を、いましめ進情
の俗あるまをきゝ。暴奏ゐ至て民を天やするれんやの。こゝ
行ふ頭會箕斂民ゐ虐取をゝやまさゝ。こゝ八郡圖離
殺き。四方土地ゝ崩きゝ。天下乱民間ゐゝ起ゝこゝ。炎

漢起ゝ天下秦平定事ゐなゝ。こゝ逐ゐ射利乃後
刀ゐ。あゝ富商大賈封候ゐひゝそ。食貨の柄を恣ゐせゝ

程よ頭會箕斂民よ虐取ゝ〳〵やまさゝ〳〵八郡圖離
救き四方土ゝ〳〵崩ゝ〳〵天下ゝ〳〵乱民間よ〳〵起ゝ〳〵炎

漢起ゝ〳〵天下秦平云事よなゝ〳〵かゝ〳〵逐ゝ射利乃後
乃よ、あゝ〳〵富商大賈封候よひゝ〳〵食貨の柄を恣よせ
こゝ村閭の民ゝ〳〵ゝ化して豪奢よなゝ〳〵游俠と事と凡貴
誼ゝ治安の疏を思ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

ものくるゝ。郡縣よ風市朝よ移るやうく。市朝の風郡縣よ移らハ
わざく其れよ市朝の風よ委俗を貴び郡縣の風よ樸素ぶを
尚ぶべきものなるよ市朝よ生まれる人ハ會ず要よ吏あり。
卿よ貨殖の家あり。士よ公よハ汁楝ぶやうり。貨賂よをき、
くとみゆるとも。私よ利欲よたゝわ。宴楽よ好まるらハなし。
志ことし私智よ逞しくて己ゝ悪を隠し。よ我欺き人よ侮うと
をかゝ元謀とゝ。其為る我きく。食膳美をきし。歌舞艶よ
競ひ。一門よ費数十百金よ及へども。おゝよを風流よ。於とも思ハ
ざるおゝ一とも倹素ぶ正直なる人をこゝく忌まをそ。我よ
志らぬ田舎人なるとゝく。我り聚ゝくあまさを嘲笑ゝ我よを
の辞語数楚入ゝ味しき事あるよ我ぼのよ一統の風となるそ。
田舎あくゝも思ハよゝ文あるゝ。華美よ我よをめ。詐偽我

の旅用諸費嵩(かさ)み候(そうら)ゆゑ一統の風となりて、田舎おくも思ひよりの事ながら、諸国(しょこく)へ聞(きこ)えわたりて、騎(き)りおごりたる事ども出来(しゅったい)して、貴ひぬる其(そ)の費用(ひよう)過分なるゆゑ、已(すで)に諸侯を悩(なや)すほどの金銀なれば、猶(なほ)おのづから金銀を貴(たっと)むやうになりて、天下共金銀を有力共(ゆうりきども)のみ専(もっぱら)とせらるゝ故(ゆえ)、諸(もろ)〳〵の流通も滞(とどこほ)りそこより金銀を世間(せけん)へ減じ、米穀を専(もっぱら)とする故(ゆえ)、金銀を貴く米穀を賤(いや)しく、貴き金銀を以(もっ)て賤き米穀をとらるゝ故、

家貧しよく〳〵あらば次貧殖の家と。實き金銀をとていやしき穀を買ひ家貧しよく〳〵除てあるとも。もっともある有數の金銀をとく〳〵無限の驕奢きわまる。有用の金銀をとて。無用の物と費〳〵やうなよ。金銀日よ虚耗して。おのおの民間よ流行せんとて粒米狼戻きわまく極めく價廉なるとも。周里の貧民ハそもく。坂さくものともむく力なきれハ。富民ハ常よ膏粱よ厭とゐ。かく〳〵みて菜色わるくあるよ。富民と常よ肥丰よ飽とも。かく〳〵みて饑死する人あるよ。中よ悪性なる若と。自から死をも救んとく〳〵法律をも犯し。盗賊をもするおそるく。おそるく。ゐんよ。世の困窮なるよ及ふよ。なるまじきの。原ハ俗よ驕奢華靡なるこの。もとよりよ驕奢よ起ふとく。一朝一夕よなりたるよあらざるとゐ。七十年いおとハ。世ろ今よりも。奢靡華なるこの。もとよりよ驕

奢よりして起るべく。一朝一夕にやまるべきにあらざるといえども、七十年以前のごとく世乱れ人々よろず驕奢に耽り、もとより驕奢に耽りなれし俗をおもむけるうえ、演劇を専らの人もおおきをいうにおよばず。其比なお代官所の支配にかかる小国よりのぼりたる者、其父祖十ヶ年已前時分は、皆衆並平野袴にて、汗馬野義などと唱えまた多き代、華奢風流のまま八百石の家禄にて、おのおの小身ながらも、おのおの交わりし賢友おおくかつ甲斐ありて、真実にて虚なく、善きをおおいに頼とし、くだらぬ事にうつつをぬかさず、ただ一筋に主君の為、国の為、在朝の士大夫世禄に治り、泰平なるまでに尽さんことを志ざし、





を救んことを八法棟梁とも犯し、盗賊ともすることおおく、況や世の困窮なるにおよんでは、いかばかりの悪事をかなさざるべき。

宴安とのゝしり、芸鴆毒なる物もとさそ、淡交淫侠まゝ
ゐるもあやしむよるべきまゝ貨殖に家遊侠の徒を論する
ますなるべしさきに芸弊那縣も掠るといふ冬とくも田舎
よさんの古風のちとくく市城ともに拙もおゝしとみるを
民もおろかにて麁暴なるまゝに大悪とする人もおるべし又も
一歩おく分別なき程なれば強俊よ陵くハ已こう怒よるべきなた
てゐるまゝもおまゝもたやう市朝の人ゝ邪智をもて人をた
ろうはやう此まゝなき程なおのれこうなる方もおゝて
恵こよ感ーやまくゝ施よれるゐゝすゝやうなるゝ已こうかゝるひ
とのおもいろうゐるまゝをまゝおきうゐ家長たる

人民を天とするゝ人ゝを志まゝに家ゝ豊当なまくゝうゐく賦税
をよくゝ飢を救恵ゝするゝ父母孩子と言ゐるやう

恵を感じやまず。従はれるに心すべきやうなること。已にかの
ものおもふべうもあれまをさまをさまをさ

驕奢共ニやゝ変(へん)て候事ハ後(のち)ニくわしく記(しる)すべし。

富士ハすそ野

多(おほ)く田よろしく民も邦(くに)ゝ平(たひら)ニ郡県(ぐんけん)も邦(くに)ゝ藩屏(はんぺい)なり。

郡県ハ民憔悴(せうすい)流離(りうり)なく天下(てんか)ゝ勢(いきほひ)もさまよく治(おさま)る。

古(いにしへ)ゟ民穏(おだやか)ニして、乱(らん)とゝなへ、郡県危(あやふ)く集(つどひ)ても危く、郡県安(やすく)集(つどひ)ても安し。すべて郡県ゟ治乱(ちらん)のうつる事(こと)ハ、そもくハ、治(おさま)る風俗(ふうぞく)のもとくハ、そこのつとめくハ、憲廟(けんべう)ゝ御時(おんとき)、おゐて士人(しじん)の好学(かうがく)おゐて、其人(そのひと)按察使(あんさつし)ニ命(めい)せられ、まく、畿内(きない)の郡県を巡(めぐ)りて、前途(ゆくさき)ゟ帰(かへ)りて学問の所ゟ贈言(おくりことば)をとらしむ。其所(そのところ)ゟ道中(どうちう)まく富士山(ふじさん)ゟ下(くだ)りて時(とき)ゟ

その山ハ乃(すなはち)ち極(きはめ)の高(たか)き山をいふ。おほ(凡)そ山(やま)の形(かたち)ハ、

多(おほ)くハ乃(すなはち)ち三(さん)ゟ五(ご)ゟ七(しち)ゟ九(く)ゟ十(じふ)ゟ百(ひやく)ゟ千(せん)ゟ万(まん)ゟ億(おく)ゟ兆(てう)ゟ京(けい)ゟ垓(がい)ゟ秭(し)ゟ穣(じやう)ゟ溝(こう)ゟ澗(かん)ゟ正(せい)ゟ載(さい)ゟ極(きはめ)ゟ恒河沙(ごうがしや)ゟ阿僧祇(あそうぎ)ゟ那由他(なゆた)ゟ不可思議(ふかしぎ)ゟ無量大数(むりやうたいすう)ゟ

きく、畿内の列縣を巡(めぐ)るに、前途(うとで)より贈言
をそしる。其所以(そのゆえ)は、道中より富士山を見(み)ざるをも

よまのせハ山在地上の家よそむく狂ひ或ハ危(あや)うきなどの事
甚よく行ハれ商ひ繁昌よく考ふるに只今市井(しせい)之類(たぐひ)の後多く
府下よりハ外(ほか)国の害をなし居る者一人来ると大害を残(のこ)し
大害を残し跡(あと)ハ方ハ郡県共流亡(ばう)に及ぶ郡県囲窮して流離
に及ぶ其(その)生(せい)ハなきまでハおよばずとも府下よりハ生
活すべきやうなく又故里へ帰るとても活方なく盗賊をして才
余をたきつけ多くハ郡県囲窮せしめ父兄親族(しんぞく)に著
してハ其(その)ものゝ為(ため)にもならず其(その)ものゝ為にもならず
よくハ其ハ府下よりそくそくを捕(とら)へ故里(こり)へ帰すとハ
へ帰すとハ一ト方ハ眼前極刑(ごくけい)に陥(おとしい)るゝ不(ふ)憫(びん)なるのみ
ならず又諸国よりも
追放(つゐはう)せらるゝ流浪(るらう)するものも郡県騒擾(さうぜう)して

ゆくゆく其外ハ多くハ府下よりそくさを振そゝぐ故里へゆき立ゝ多のよそおわるき眼前極刑よ悩るゝ世人なるのうち

ゆるすべく悪事をいくたもおかすゆゑ又諸国より追放せらるゝ流浪するもの多く那縣賑ひ行く。去るよりきて多くおもおもくそゝぐ。そゝぎ方ハ悪業とくく府下ハ豪まるゆゑくわさ片那縣ゆゝたるゆゑ府下ハ盗賊やこうくまるくく数多ハ用ろ筆舌をもすべ風俗よりハ貴族厚誼の家よりさそうゆゑ多くのまるまく下人を抱るよ今ハのもさら男の異形ゆゑ依まるをそろよなんおよそ外ハ出ざる者よ。さやうなるハかすく世よ遠きものよ。宅内の側座よおちまよかく飲酒指定ゆゑ酔外おくく多くハ失火を

ありとも其父最悪性なる物に貸をぬすみ盗ん
だりてこれらの人の宅よりと火をたくもあるやうにきこ
ゆるゆゑ人多き者のそ得おきは怪よろしく畢竟事奏
をもの共流撃ちくらよりよ市朝の妻偽を抑へ於縣地面窮
を賑ふにはよろしからうかと。

天下共寶

さきに左ちよ太平而多ひ乃ひ人ハ大ひに人若偽風をやう心
妻偽を招く倹素を崇んとやうらハ若倹廉直の士を撰んで官よ
ら志もるわよ。號令科條の及へきよわら次第五倫ふくらぢや。
以身教者從以言教者訟官長刃ひ率ハ官ゟ畏慎てお

のれそのうち志ひ官長ひ称ハ之俗をとく教と云と。其
下等ゟく服せを。法令屬下まとも。よく多まよなるとく

ものにそのうち志ある官長の一二名を撰び教導の事。其下等の役人に服せざる令屢下ることもあるべきなり。多くは以身教者從以言教者訟官長又一二名ならば畏慎ておのずからあらためん。下等官長その人おおむねさまざまの人なるべきゆえ同役のうち志ある人を撰び改正の令を厥下にくだすべし。孔子も爲政在人其人存則政挙其人亡則政息とのたまえば前条ある故人代の家を含て二典の文を論ぜず。歴数のまた及べるを前条に歩歴の法始て虞書に見ゆるごとく後世を啓くべき粋志なるべし。その始ある異なのは義和の命考くべからざるもやむを得ず。やさいごろく天文運動のあらまし。星動の人をもって候せん

ゐるとも其きたりの包微するをそこに驕泊をつゝしめ如何の事はよのつゆさ程く人の自力をもつて審さするに聖人敬天ひたすらおそれをおくつゝしみ風雨につけて修してゆく感服しき天度八萬古不易おく運速盈縮常おる地ひろさ動物おのづから定法の及ぶさる所おるをこゝに況や人心変動常なく況や人心変動常なく乃ち偽約ひいきを定めけをもつてあるまじきおらんおのなり材八取ばかりとも番夫ひ利口を張釈之ありきを黙さく賊八罪をゆるすとも掾吏の自前八呉祐ありきを黙さく慶を放ちをもて託圖のにをとり卵を盗ちとも千城ひ将をすてゝ孫弘布被八倹よりく矯情ひ姦をきらふく郭子儀の大老欲八奢よりく似て汚行ひ譏を賄さんぞ一定ひ格よ泥んて萬変ひ中を制せんとならばいをゆれ柱よ膠ちく鑿を敲く舟よ刻く

託國のことを卵を盗ろうも千載の将をすてて子孫弘う布
殺人倫よりも繻恥の妻をとるべく郭子儀の大志欲人奏よ似



て汚行の議を貽さんぞ一定の格よ泥んで萬変の
を制せんとならば柱よ膠さく琴を鼓し舟よ刻く
剣を求るなり。いつく変よわひ宜きよかなのくまるを芸人を
得てばを人よ神く行らむもと操縦進退時よろ
よろよろして要通する術なければ用ゐまじ次に華を賜
てば華よ非せらまじ。さやうの人多く宝よおますまよ任せば
国政なの浮るまくのあんぱし行きを衆し服して四よ治
平ならむし。さまば天下の宝なのよ。人材よ必ずる地あるべき
ものなり楚人白珩を宝として賢と宝とすおく王孫圉のい
ひします。楚語よ人へあり。梁恵王吾国よ径寸の珠おまく。

車駕を後十二乗を照さとく齊の威を洛らき玉ふ。威を
蓋(がい)人四臣あまてくの室を照をほそ玉乗のくなあれやとくそき
玉ふそ恵(くい)まも慚(くぐ)る色あまてくおそきよ分くヤも忘まなな
まてくひそうよ感一なる八
東照宮御治まなくわる時一役人関あるまわてくよ。ひれ
老臣よりと代まよ作何らるくまおく思てそ其人うくへいう
なる故とも弘あ正よ其人てかのくにらっもくへ入うくはそよ八
いうやうれ人物まくや存知いねうとれいうやせ八内観色う
そやまそ。麾(き)下の多き紳士をのこうに其人うくとまとそくひう
誤(あやまり)なのまま文を治法士の若恵を忘しもうくき職よもわれねよ

問てもうねとこうめ八ひうしまあり民伴のもの、麾下人多
き中まも同ひ係もなのくまくく人ほまうまこねれの分中も

そやまて。麾下の多き歳士をのこらず其人うらとをまとめ、そくわつ誤(あやまり)なのち又々油法士の若冠を以しもつくき職よりおわねよ

同てもらねとこのめハわつひうまるの兵伴のもの、麾下人多き中すら同下役の孫もなのこるまくくまこねの分まもおわねとそまきは汝も第一彩色(えんじ)の若冠を見はまるくわつ今共たとく弱りはそひひまれを職とするものなるまで、法まよ分てもお知せんとくまくやむくきまま。六さやうのまをハもちて。おのき職をいけまて重(おき)ハわつ月かひもちひるるみくまた。そおまよのいやまくまくまく

奥の類よの名物堪てくまあるとやくハなのかうあてこそ
よ思ひんと思ふかそ。そ。ととて、そうの名地おくもおれ国家共用
よう多次なくてもまた欠ねよのなるまう。う寶の中共実どくよ
人よそめたれなるく。ふまハこと学くにくせのやうよのやす
なるまさしそまをよう我のますあてこうがやきくつうら唯今
のやうなる過答をはすうおくのさて汝るうのとく出入をる
ぬくうまを立ちそうまとおもそく佐古共んうあてあくなる
て。将家のまうし渕よをうくせんさまハ塵よの士恥を考
義をたうハ国家共元気なのそくまよ諸士のんきくなく
なるとく恥をたうれ。鼻を曲るくも息さくてなと、そよ

やうにんなのそゆきなのかたちのかやをするとう倫あくて義を
ちるんなうそ。ちうけんへの元気うせくく死するさくく

義をもち、国家の元氣なのに、そもそも諸士のくさくさなるは、恥を忘れ、辱を曲ともくも、皇さくいてなく、とやかくやうになのきなのが、わるいのではなくて、義をもちこたえるものが、すくないからである。もしも人の元氣さえ、盛んであるならば、国家の元氣養へくやうて、敗亡より免れるべきよおもふ。元氣沮喪するよりよくないものはない。大切のまかせ、元氣を作おこすには、藪の叶作よりよろしく考ふる人材を宝寶とし給ひ維を固め元氣と志ふるまい、治国の急務である。宗廟の基なるべし。衰弊の人ふるまいよりは元氣の似たるもきらひ。古今よりすくまる給ふるまいとかくもし中より花ひをひきうけ、こうやうまでも及ぶを周礼の家宰あると歴代の吏部あり。常よりの卿のよう振くるあるの人材を撰ぶ故

已の職とす。其外閥閲の家も。不識の材を保任して。朝廷より登進むるを奉ることなければ。ちうわまやく後世よろづ古道日よる衰へ。君相ともに己を急務とせず。常に人の賢否をもろ心なく。ただ選挙のみをとりて。治国宏詞身言書判のまやまやすきに走り。吏部ある人と。茅渟衡の職よおろそかにして。簿書訟冤さへ。煩多きをのこりなくわづらひ。代〻さるべき官なども。況やなほざりおほく縁会よりて。未君相たる人びとさへ。ややもすれば。ただ次第をきりて。心ぞのこの差ちがふ人多きを。怪訝動もすれば。この盛意に承順する者おほくして。治世の後人材輩出し。庶政脩挙して文明



日よ開きて。天下泰平の化に浴せざるはなし。元亀
東照宮ただ遺沢よおほふや。日光奉行も知るべきなり。

この老若男女(なんにょ)ともに忠誠(ちゅうせい)謀動(ぼうどう)きくごとの盛意(せいい)より帰順(きじゅん)する者(もの)おびただしく治世(ちせい)の後人材輩出(じんざいはいしゅつ)し庶政脩挙(しょせいしゅうきょ)し文明(ぶんめい)



四方(しほう)開(ひら)けて天下(てんか)泰平(たいへい)の化(か)に浴(よく)せさるハなし。況(いわん)や東照宮(とうしょうぐう)の遺沢(いたく)よおひすや。日光奉行(にっこうぶぎょう)も怠(おこた)るへきならす。

風俗ハ政(まつりごと)の田地

去(さる)ころ天下(てんか)国家(こっか)の風俗(ふうぞく)とりわけ大切(たいせつ)なるハなし。喜怒(きど)の感(かん)天地(てんち)よく。其(その)ありさまハ雷(かみなり)のごとく。あるきたるへきなれも。世俗(せぞく)の大勢(たいせい)ますますとりよやうに一世(いっせ)の風俗(ふうぞく)ハ移(うつ)るさる程(ほど)に號令(ごうれい)法(のり)もそれに一遍(いっぺん)なるやうなまでにて。おのおの達(たっ)しかたく。なりくに来(きた)なる風俗(ふうぞく)をまねて。おのおの達(たっ)しかたく。なりくに来(きた)まて遂(とげ)る程(ほど)に。局面(きょくめん)そこなわれ俗(ぞく)のなるよなるやうにやもそう。なれハ風俗(ふうぞく)を回(かえ)なをす政(まつりごと)ハ穀粟(こくぞく)よ

よう。そもそも嘉穀の稔ること。地もって形(あらわ)れ、そ
のちかづくべきのことを改良せんとするも風俗そのく
ハ行はれがたく。穀粟のそこなわんことを欲せば。地もって
くハわるく。政令の行はれんことを欲せば。風俗そのよろ
しきをうべきハ。君子多くして小人少なきにあり。小人多
くして君子少なきにあり。君子多くして小人少なきハ
おさおさ文化をもとむるに不易(やすき)の道なり。小人多くして君子
さきのごとくなるハ。なおを用ゐるすべきもとむるに古のごと
き道とをくして。世は風俗そのよろしきを急とハ改まら
ぬものそう。ゆえに道よく移るハやすく。善よく移るハ難きものなり。今
風俗をあんとするハ。おしきのうえ（おのずからなるがごとくせざれば）
もってよきを風俗と維持(ゆいじ)するにあり。風俗と維持をも
つものハ。君一人の力おくるに及ぶ。時と執権(しっけん)とをもって

ぬ物そうに、中よき兎よく移ろハやまそだ、若よく移ろハ消きおかなる兎ハ今
風俗を改んとなるべくハ急におこなハざるよしにおきたし

もとよりある人心を風俗を維持(ゐじ)するとうまでもなく風俗と維持をこゝろの人おのづから慎(つゝし)まざるをえざるものなれバ其
ものを事なくするやうなるおもひバ其
身をあやまち人の笑ひを取るにいたるまでは
今もさる事ハ風俗を改(あらた)めてハ急に今此代
よろよろ倹素ふ残るにおいてハ毛頭も仕業(しわざ)超(こ)すべきや
天下の志ある者ハ必ず笑ふべし。まして諸大名ハ常
よ聲(こえ)をかけられ、急ぎ御改革よろしくをおこなハるゝ
まくの淫佚(いんいつ)そしるやうにてハ

上の御盛徳に報ひまつらん数ならぬ身よりく考へ作りすゝめまつらまほしく思ひ侍れど、なほ諸役人として、なすべきことの外に人あるべきさまにて名使ひ給ふべくもあらず。無くてあるべからぬ治めのきはのみにあるやうにみえんと方治寛文のころよりよく世の翁(おう)にて、貴富(たっと)き家にもよき嫁を購(もと)めとりて狂(きょう)よく、其價(あたい)をさへ倍遣けるとぞ。阿波豊後も忠秋も其後嫁をすゝめて、常に筵を有側に重てなさせてきうまにあてさするに、夜やうやうに人きくく。其後世よこれなき嫁を厚價(こうか)にもとめておき宮醫をとくく。ちかきころまでありしが、



ふたゝび遣しなきよしをいひきたる。その宮醫豊州よりよく薬を達して、帰りしかどもさてよろしくなりて

きく・其こゝろ世よのつねなき勢と厚償（あつくつぐな）ひとをもて
召官醫をこゝろざし・ちかきころわかしき勢をもちゐて

てあやまりきます。おく仏の某さまの子供なを鵜をすきにへ。
こやさやうにきこゆれ人と、おなじ〳〵に今度を始めと勢すきに成
やめ仕るもとい生こ。へ。かの夜警もまおるくこと。ていわ。ね
おのあるまますやめるに人の志とくく多はく後るあを。しらひ
くもさてわるくきと上の御為を忘ねよして。ていうを初のまも。
世の風俗も移りて。権威(けん)もおのれやうのまおうこと。ほく
おまるく経よかく。おまけを。芸不問て後執権の底。法生る
ほゆ引よ語るく格よくおこらばおのよまもお酒や幸よ治せ
らまて行よ。芸風ちよ移りまく。まこの役人おて心廉潔質直
なる人おまて風俗を維持(ゆいじ)せまこに。さまおく前おの古風
俗の上ちをまく移りそさらまおく又下ち上も移りおく
おまくわるをまく人ハちの深すめ尺下流すま深

らまで往よ。芸妓ちよ稼ぐべく。事この役人あてし豪潔質朴
なる人おほくて風俗を維持せしむる事おもし
俗のおもむきよく稼ぐべきさらまゐく又下ものも稼ぐべく
おほくなりぬるをよく稼ぐ人の深すめ尺下流泥塞を
濁さぬ下流泥塞をよく稼ぐ人の深すめ尺下流泥塞を
濁さぬ芸泥をよく稼ぐ人の自せく。潔くよ流よなりぬる。今
富商大賈の子弟武人俗吏の悪堂主芸の市井を頼の使
日夜娼家戯場をよく家とし。酒食博奕をもつぱら芸
風よく稼ぐべく。列座那ちの分ぜく。そうよ娼家妓を好む
もおやじ士大夫と、そろく分ぜくべきべく戯場のはを学ぶ
おやじ。そ結下おほくよく稼ぐよおほすや。今世流俗を云ふんと
なら、ぶよく。よるの官長をはじめ芸。深く沈溺

ことのまゝ、又は、ある画書を捜検せざる、下流の流弊
後ち、いたづら、今比なの賤民とも、同じく府廳へ出
き狂訴あるに、究竟すること、おもてに、官へ訴ふんとて
も、大ごとに拘り、礼義を失ふ様に、府廳の時
なれば、王にいたまの子細をくりく陳ずるまわさえ
ざまよく下吏、さまの推怒のかゝて威勢を募る狂なおし
ずくも公倒なるまわも、厳譴せらるゝことを一ことも
口と相違すれまわも、結局せらるゝよりよろこぶ、その子分
の輩おてらくも府廳へ伴ふをもつて雑事とし、その上府
廳八多く一ヶ所にて、官吏伴ふ同じくまわなの山のごと



集くまおよびのごとく多くの人数を引き連れ、滞留
多くの日、うちを空る狂な甚だ比隣什伍相共にも

の設おてもろもろ府廳（てい）へ伺うをもちいなもろもろ雜事もとりその上府
廳ハ多くハ一手にあつかひ事ハ伺ひ出ハかさなのごとく山のごとく
なれバ、おさおさまつ一周ハさらにひとなのやく費用もの冷
なるをもてよろしからず大なるハ下おく会席をもうけ
次かくハ蕃賊悪党ハ、ころ囚人多くなへき、而後府廳（ふてい）を
さて又も作るまでやをもちこたへむつかしきなれバ会議
悪と便治（しやく）せんをもとめハ方くはおもふ小廳をそこ、囲周を設
け、人を擇ミ其長とし、そのもとのくに表街と各文武の限
をさだめすべて府廳より属せしむべしさて什伍（じうご）をもて
嚴（げん）ミし比隣（ひりん）をもて相いましめ善をすすめ悪をとどめ

山根(さんこん)なりて人のそと見しは衆目(しゅうもく)おおなれどの悪(あく)あるをは。
あるじ其人(そのひと)囚(とら)えの法(ほう)をおこなうのそなえともずこやるそを
まねば監司(かんし)是(これ)を告(つげ)ざるをえやうみ其場(そのば)まく金波(きんぱ)のと将
科(とが)なしハ南有(なんゆう)すなしこを科(とが)なるハ捕小獄(ほしょうごく)もくるせ巡(めぐ)て
金波(きんぱ)の逆(ぎゃく)を委(つまび)らに奥(おく)ゆく其人(そのひと)を糺(ただ)せく府廳(ふちょう)は遣(つかわ)
て聽(きく)この處決(しょけつ)を作(なす)く多(おお)き吉(よ)のお然(しか)ハ府下(ふか)の人(ひと)をなるる
おくも官(つかさ)は遠(とお)するよ府廳(ふちょう)よりの官(つかさ)なく府廳(ふちょう)も小廳(こちょう)の成(なり)
獄(ごく)を更(さら)く聽(きく)乃(すなわ)せハ以(もっ)く應對(おうたい)簡易(かんい)みて下(くだ)よく新(あらた)るも。
壅滞(ようたい)さるの患(うれい)なるくしてそときのこなるこれ下の悪霊郷
曲(きょく)のるよ隠(かく)くきやうなく人(ひと)く庸行(ようこう)とせ吉(よ)もこれ(?)

急(きゅう)に感服(かんぷく)するまもなくとも面革(めんかく)よハ動(うご)なるんてまして
日月(じつげつ)を経(へ)なの尽(ことごと)く俗(ぞく)も漸(ようや)く改(あらた)まぬへ。年(とし)官(つかさ)もある人(ひと)太う

急ゝ感服するまゝなるべくも面革よハ動もなのんでゐして
俗の改まれ巻き郊ゝなすゝ多へ一並の料簡よ
く、さゝ風俗も舎議ゝ迂遠なのやうな開ゆまゝ
物ゝ急ゝ国改を好ゝ士風ゝ敗るのもゝゝ
ゝとおもくゝ腐儒迂滅の故態とや、そんなゝなぐら
杞憂天のあくもくゝ



壅滞ゝゝの患なくゝ、そゝきのゝゝゝの悪霊郷
曲のゝよ隠ろくきやうなくゝ庸行ゝゝゝゝゝ

駿墨雜誌卷二

駁墓雜話卷二